

---

# 魔装戦士 EXE-エグゼ-

ピコピコハンマー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔装戦士 EXE - エグゼ -

### 【Nコード】

N6489R

### 【作者名】

ピコピコハンマー

### 【あらすじ】

異世界で生まれた心を持つ宝石生命体、「レイジングコア」と莫大なエネルギーを持つ「ロストロギア」。

ロストロギアの一種「ジュエルシード」とレイジングコアが現代社会に流れ着いた。

レイジングコアはその世界の機械と融合し、変形ロボット「魔装戦士」となって機械の持ち主と行動を共にしてロストロギアの回収に当たる。

しかし絡み合うレイジングコアの思惑、深まる謎、そして巨大な敵。これら一つ一つを乗り越えた時、急展開が待っていた。

## プロローグ（前書き）

初めまして。ピコピコハンマーと申します。

初心者なので表現が拙いですが応援よろしく願いします。

## プロローグ

それらは、生まれた。

それらは、自我を持つようになった。

それらは、「主」に愛された。

そして、それらは「主」を失った。

それらは魔法のない世界にたどり着いた。

それらは、拾われた。

それらは、機械と一つになった。

それらは、反発しあった。

憎みあった。

けれども、絆を手にした。

大きな敵が立ちふさがるが、

恐れない。

傷つこうとも。何度も地を這おうとも。

やがてその中の「一つ」が叫んだ。

「全力全開イイイイイイ!!!!!!」

## 第1話 誕生と漂流（前書き）

今回はレイジングコアが生まれて現代社会につくまでです。

なのはからは設定を大幅に変えた変えたユーノくんとあまり変わらないナンバーズのドワーエ、スカエリツティ、名前しか出ませんがはやてが登場です。

ていうかなのはリスpektキャラしか出ませんがw

## 第1話 誕生と漂流

異次元世界は、無数に存在する。

魔法が発達した世界、住人が人間ではない世界、科学が異常発達し、巨大ロボットが当たり前となった世界。

もちろん我々が済むこの世界もそのうちの一つである。

今回はその中の一つの世界の国から物語を始めよう。

ミッドチルダ。

それがこの世界での国の名だ。この世界に触れておくと、この世界では魔法と科学が共存しあって人々の生活に関わり合っている。

中でもミッドチルダはその技術に長け、急速に生活水準が伸びている国であった。

そのミッドチルダの首都、クラナガンには政府直属の研究機関が立ち並び、文化の機関もあれば、科学系の機関、さらにはこの世界特有の魔法研究機関もある。

そして現在時刻は深夜。道路に見える人影が見えなくなり、ビルの明かりもぼつぼつとある。

さらにその中の一つの研究機関ビル、さらにビル内部の研究室では何やら怪しい実験が行われていた。

白い無地のテーブルの上には立方体の強化プラスチックケース。ここからのびる導線は部屋にある4つのコンピューターに繋がっていた。

ケースの中には薄い緑色をしたガスのようなものが充満している。



ある一つのコンピュータに向かう男がいた。男がコンピュータでプログラミング暗号を送るたびにケースが電流を上げて光る。その作業が終わると男は隣のコンピュータからまた別の暗号を送る。ケースが光る。

その作業を何十回繰り返しただろうか、その瞬間は訪れた。

暗号を受けたケースがイナズマを放ち、突如爆発。爆発の威力は大きく、ケースを粉々にふっ飛ばした。

むろん男もただではすまず、壁にその体を強かに打ち付けられる。しかし男のヒットポイントは高いらしく、頭を左右に振ってくらくらするのを抑えるとテーブルに向かった。

テーブルも粉々とは言わないが真っ二つになっていて、ケースだったプラスチックの破片は全て床に散らばっていた。

男は焦るようにゴミとなった実験道具の破片の中を探る。

「あった。」

それはすぐに見つかった。目的のブツを目の高さまで持ち上げた。

遅れたが男について紹介しよう。

彼はユーノ・スクライア。由緒正しい魔法使いの家に生まれた。

ユーノは幼いころから魔法使いとしても優秀で、有望株だった。

しかし転機はユーノが6歳の時に訪れた。

当時魔法とプログラミング暗号が合わさって生まれた宝石生命体、

「レイジングコア」が初めて開発されたのだ。

初めてのレイジングコアは「ハヤテ」と名付けられ、テレビのニュースでは連日ハヤテのインタビューが行われていた。

幼いユーノ少年は低く落ち着いた声で喋るハヤテに魅せられ、オリ

ジナルのレイジングコアを作る事が夢となって行った。

その後ユーノは高校大学を工業系で過ごし、たくさんの事を勉強した。成績は常にトップだった。

そして大学を卒業後、この研究所に就職したというわけである。

ちなみにこの研究所は戦車などの質量兵器を魔法で動かせるようにするのが主なため、ユーノのレイジングコア作成作業は深夜にならざるを得なかった。

そして今日、ついにレイジングコアは完成したのだ。

ユーノは床からピンク色の丸いレイジングコアを拾う。そして、話しかけた。

「おはよう、レイジングコアくん。」

ハタから見たら結構病気な光景ではあるが、

「おはようございます。マスター。」

もちろんレイジングコアが返事をしてくれる。

しばらくユーノとレイジングコアは喋っていた。

「僕はユーノっていうんだ。よろしくね。」

「こちらこそよろしく申し上げます。ユーノ様。」

「『様』はいらないよ。あ、そうだ。君には名前がないよね。名前をつけてあげようか?」

「よろしくお願いします。」

うくん、と唸って考えるユーノ。すると突然はじけたように何かを思いついたようだ。

「そうだ！僕の家は代々魔法使いなんだけど、魔法の文献で呼んだんだ。昔の魔法使いの呪文で正義の事を『エグゼ』っていうんだって。君の名前はエグゼだ！」

「ありがとうございます。しかしなぜ、私が『正義』なのですか？」  
「君に正義の心を持つプログラミングを施したからさ！」  
「なるほど。」

ふふつと笑うユーノ。そこに誰かが入ってきた。

「あら、ユーノくん、まだ仕事してたの？」

先輩のアールだ。銀髪のロングヘアーで、何かの病気らしく右目に眼帯を付けている。顔立ちは美人だ。仕事着であるツナギを着て入ってきた。

ユーノは急いでレイジングコアをツナギの胸ポケットに入れる。

「ああ、はい。そうですね。」

「大変ねえ、若い子は。」

「そうですね。」

「あ、もう、ダメじゃないの。こんなに散らかしちゃって。今夜は私が片づけてあげるわ。」

「ありがとうございます。」

さすがにこの空気はまずい。この場は片づけをこの人に任せ、さっさと帰るのが吉だ。そう考えるが速く、荷物のリュックを持って帰ろうとする。

その間にもアールはどんどん話しかけてくる。

「こんなところで何してたの？何作ってたの？上から怒られるわよ？」

「先輩！すみません！僕はこれで帰ります！では！」  
そう言い残して帰ろうとした。

「何を作ったのか答えないとあなた死ぬわよ？」

かちん、と首筋で音がする。見ると包丁のような刃があった。さらにそれをたどるとなんとアールの手、というか爪だったのだ。

「うわあああああ！！！！！！！！！」  
ユーノはびっくりして尻もちをつく。その拍子に胸ポケットからエグゼがこぼれ落ち、部屋へと転がって行ったが気づかなかった。  
追い打ちをかけるようにアールの姿が見る見るうちに変わっていき、ぴっちりとしたスーツの体、そしてオレンジの髪ロングヘアになって両目がある女に代わった。

「私はアールではなく、スカエリツティ様に仕える親衛隊、ナンバーズの2番機、ドゥーエだ。スカエリツティ様の命令により、貴様とレイジングゴアを抹殺する。」

「わ、わ、なぜ、僕とエグゼを殺そうとするんだ！？」

「スカエリツティ様は私たちを使って全ての異次元世界の支配を指しているのだ。」

「それがどうして僕とエグゼに関係がある！」

はあ、とため息をつくドゥーエ。しかしその顔はすぐに狂気じみた笑い顔に変わった。

「お前は何も知らないんだな。まあその方が都合が良い。ならば何も知らずに死んでゆけ！」

「うわっ！」

ドゥーエが包丁状の爪、ピアッシングネイルを振り下ろす。ユーノはそれをかわし、あちこちに魔法陣を仕掛けてバインドと呼ばれる拘束魔法を使った。だが、

「はあっ！」

簡単に破られた。その時、ユーノはようやくエグゼがポケットになり事を悟った。焦って周りを見渡すと実験室のロッカーの下に落ちていた。

ピアッシングネイルをかわしていき、なんとか部屋に入ってエグゼ

を拾う。ほっとした時であった。

どすっという鈍い音が響き渡る。ユーノが下を見ると左胸からピアッシングネイルが突き出ていた。

「終わったな。」

ドゥーエが勝ち誇ったようにつぶやく。

「次はレイジングゴアだな。」

ずるりとピアッシングネイルが引かれた。大量の血が胸と背中の中から噴き出す。

「ユーノ！大丈夫ですか！」

エグゼが何回も心配するがそれでもなおユーノは立ち上がり、目の前の真ん中に空間が空いている機械の空間部分にエグゼを置いた。

「何をやるおつもりですか！」

「君を・・・異次元世界に・・・飛ばすんだ・・・」

「なぜそのような事を！」

「僕は・・・死んでもいいけど・・・君は・・・死んだら・・・困るんだ・・・」

「なぜ私が生き残らなければならない！」

「僕は・・・もう26年も生きてんだ・・・君は・・・生まれたばかりの・・・赤ん坊なんだ・・・だからこそ生き残って欲しい・・・」

そう言い終えると同時にユーノは機械のスイッチを押す。そう、この機械は次元転送装置なのだ。

それを阻止しようとドゥーエが襲いかかるがユーノは最後の力を振り絞り、逆に押し倒す。

ユーノがドゥーエを押さえている間にエグゼの転送が始まった。機械がスパークし、イナズマがまたしてもほとばしる。



## 第1話 誕生と漂流（後書き）

と、いうわけでなんか駆け足気味の1話終了！早く現代社会を書きたいもので・・・すいませんorz

さて次回は・・・エグゼが・・・なるのかな？アレに。

あ、あと先にネタバレしときます。このエグゼ、なのはポジションです。

第2話 邂逅と融合 - side NAGOYA - (前書き)

今回から舞台がいよいよ現代社会に移ります！



「すいませーん。」

「はい。」

交番で仕事をしていた警官が立ちあがる。どうやら迷い人のようだ。警官は迷い人に道を説明する。

「どうもありがとうございました。」

深々と頭を下げて旅人は去って行った。警官は笑顔で見送った後、交番の中へと戻った。

警官の名は結野光介《ゆうのこうすけ》。2ヶ月前に名古屋郊外の住宅街近くにある交番に配属された新米警察官だ。

幼いころから警察官という職業に憧れていた結野は猛勉強の末に警察学校に入学。

さらに数多の訓練をやり抜いてついに今年学校を卒業し、さっそくこの交番に配属となったのである。

さて結野は交番に入ると仕事の続きをする。その時、

「結野、コーヒー飲むか？」

と声がかかった。声をかけたのはこの交番の所長、黒野原夫《くろのはらお》だ。

週1でジムに行ってるらしく、制服の上からでもわかるそこんじよ。そこらの警察官よりも鍛え上げられた体、

ニヒルな顔立ちのナイスミドルといった風貌である。

「あ、どうも。ありがとうございます。」

結野は感謝してコーヒーの入ったマグカップを受け取り、ずずつと

一口飲む。

さらに黒野は話しかける。

「そういえば、今日お前昼から非番だけど何するの？」

「今日は車買いに行くんですよ。中古車ですけど。」

「お前って免許持ってたっけ。」

「いや、持ってなかったらミニパト運転できませんよ。」

「あ、そっか。」

はっはっは、と冗談めかして笑う黒野。結野はやれやれ、と言った顔をする。

「何目当てで行くの？」

「クーペがあればいいんですけどねえ。中古車なんで値段の事も考えと軽しか無いと思いますけど。」

「そうか、と頷く黒野。」

「そういや今日昼からはあのお嬢さんだな。」

「あ、そうですね。」

「あのお嬢さん」というのは、ここで働く二人目の婦警、月村すずかのことである。

巨大企業グループ、月村産業の令嬢で、外見もおしとやかな女性である。

黒野は彼女の事を「お嬢さん」と呼んでいるのである。

ちなみにここで働く巡査はあと一人いるのだがそれはまた今度。

じゃ、仕事戻るぞと言われて黒野と結野は仕事再開した。

そして午前11時。

「では月村さん、よろしくお願ひしますね。」

「こちらこそよろしく願います。」

引き継ぎが終わると結野はロッカーで着替えた後、ロッカーから折りたたみ自転車と荷物であるリュックを取り出して外へ向かう。

月はもう6月半ば。おなじみの梅雨の時期で、昨日も大雨であった。しかし今日は珍しいカンカン照り。蒸発した蒸気が鼻をくすぐる。

ふと横の駐車場を見ると月村のベンツSクラス。

「・・・いいなあ・・・。」

そんな風に呟き、結野は一人中古車店へと向かった。

「いらつしゃいませ。」

結野を出迎えたのはメガネをかけた若めの店長であった。名は輪田綾太《りんだこうた》。

その輪田と結野は展示場内を歩きながら話す。

「今日はそのようなお車をお探しで？」

「クーペありませんか？無かったら軽でもいいですけど。」

「クーペですかあ・・・あるにはあるんですけどね。」

「本当ですか！どこですか！行きましょう！」

「あ、ちよつと・・・私はキーを取ってきますから・・・。」

ワクワクする結野をよそに、輪田はどこか気持ち落ちた様子であった。

紹介された確かにクーペはそこにあった。しかしである。

「これいつのなんですか・・・？」

結野は中古車を買うにあたって「車は走ればよし」というポリシーがあつたため、多少古くても無視するつもりであった。しかし目の前のそれは見た目かなり古く、キズや凹みはないもののホコリがめだっている。

輪田はこの車について説明をした。

「これが当店で唯一のクーペなんですけど……。これは1989年製のトヨタ・セリカですね。」

「セリカ!?これが昔のセリカなんですか!?!」

目の前のセリカは今のセリカと違い、普通の乗用車に似た形で、ヘッドライトも細い。スポーツカー色の強い現行セリカとは違った趣である。

「へえ……。まあホコリはきれいにできますしね。それにしてもヘッドライト細いですね。」

「あ、ヘッドライトなんですがね。」

そう言っただけで輪田は車に乗り込む。エンジンは難なくかかった。いかにも環境に悪そうな黒煙がぶはつと吐きだされる。

結野は「?」と言った感じで事のあらましをみていたが、次の瞬間に起きた出来事に目を見張った。

細長いヘッドライトのナナメ上から別の大きいヘッドが目覚ますように起き上がったのだ。

その時の結野の瞳は売り場のおもちゃを見る幼児の瞳をしていた。

降りてきた輪田に結野は言い寄った。

「輪田さん!僕、これ買います!」

「あ、いいんですか……。?」

「え、何か問題があるんですか?」

輪田は今までの表情よりもさらに深刻な顔をして言う。

「お客さんは日本に住んでいた海外モデルのインハルトさんを知っていますか?」

「ああ、先月練炭自殺で無くなってしまいましたね。」

「実はですね……。その自殺で使われた車がこれなんですよ……。」

「ひゅうっつう、と風が吹きすさぶ。沈黙が辺りを漂っていく。その沈黙を破ったのは結野のこんな発言であった。」

「……へえー。」

「あらっ、と肩だけコケる輪田。」

「気にならないんですか？」

「何がですか？」

「幽霊。」

「見た人はいるんですか？」

「いや、今までこれを買おうとした人は幽霊が出るって噂をしてみましたよ？」

結野は「はっ」と呆れたように息を吐き出した。

「噂でしょ？幽霊を見たんですか、輪田さんは？」

「いえ、見てませんけど……。」

「じゃあそんなのは噂と言うかデマですね。」

そう言いながら結野は財布からクレジットカードを取り出した。

「買い手がいないなら僕は買いますよ、この車をね。」

宵を迎えるアパートの駐車場に一台のセリカが停まった。結野が運転するそれである。

早速結野は荷物を自室に置くこととしたときである。

助手席に載せたリュックを上上げた時、何かがシートの上にごぼれ落ちた。

結野はそれを拾い上げる。ピンク色をした丸い宝石だ。

「きれいだなあ。」

思わずつぶやいてしまった。しかしここで問題が出る。

「この宝石が誰のものか」と言う事だ。

まさかあの店長ではあるまいだろうし、前オーナーの故アインハルトさんのものとは考えにくい。

遺失物として名古屋にある本署で調べてもらおうと結野が結論づけた時、うっかりその宝石を手からこぼしてしまった。

それが始まりだった。

宝石からまばゆい光が放たれる。その光は宝石と同じピンク色で、車体全体を包むように光っていた。

その光は十数秒が過ぎると消えてゆく。

車内で目をかばっていた結野がおそるおそる目を開く。内装には変わりがないように思われる。

結野はほっとしたが、目の前の光景に驚き、慌てて外に出るとありえない光景がそこにはあった。

購入時のセリカは深緑色であった。しかしそれが今の光の影響かは分からないが汚れのない白に代わっていた。

さすがに成形色である窓縁やワイパーなどはそのままではあるが。

さてこの光景に驚いた結野はもう一度車に乗り込み、ある場所へと向かったのであった。

第2話 邂逅と融合 - side NAGOYA - (後書き)

今回からここでは新キャラが出るたびに名前の元ネタを紹介している  
こうと思います。

黒野原夫：クロノ・ハラオウン

月村すずか：そのまま

輪田綾太：リンディ・ハラオウンとその中の人の男へのアレンジ。

エグゼ：レイジングハート・エクセリオン

あと、アインハルト・ストラトスのファンはごめんなさい。(汗)

感想などをお待ちしております。

### 第3話 襲撃と変形（前書き）

色々忙しくて筆が進まない……。さて今回はエグゼがついに……。！？



### 第3話 襲撃と変形

「高町！！俺だ！！開けてくれ！！」

時刻は夜の7時。「高町」の表札がついている門についている呼び鈴を結野は何度も何度も押していた。

結野がここに来たのには理由がある。

結野の高校時代の同級生で、「高町なのは」という女の子がいる。彼女の家は代々家業として自動車の整備工場をしていた。

そこで結野は自らの愛車に起こった異変を高町にどうにかしてもらおうとしたのである。

「せ、先輩、いきなり夜に呼び出してどうしたんですか！」

玄関から高町が出てきた。コートの下にハーフパンツとシャツを着ており、お世辞にもおしゃれとは言えない感じからかなりリラックスしていたらしい。

ちなみになぜこんなに慌てているのかと言うと簡潔に言おう。

恋をしているのである。

高校時代に高町は何かと結野に頼ってきた。その頼りの気持ちがいっつしか恋に代わっていったのである。



取り付けられた街灯に照らされ、純白の車体はまばゆい輝きを放っている。

それは天使の梯子を浴びる神のようにも思われた。

そう考えるとなぜ結野は「幽霊幽霊」と喚んでいるのだろうか。こんなにキレイな車がかわいそうではないか。

この時ばかりはさすがの高町もおかしくは思った。ともかく、夜の住宅街で大声を出されると困るので結野を引きずって中に入る。

ちなみに路上駐車していた結野のセリカはあとで高町がレッカーで実家裏手にある整備工場まで持っていった。

「ん……。」

結野は目を覚ました。知らない天井が目に入る。むくりと起き上がると、自身の体にかかれていたフェレットのキャラクターが描かれたかわいらしいタオルケットが下に落ちる。

それを見て、結野は自分が高町の家ソファで寝かされている事を理解した。と言う事は高町が自分をここまで連れてきたのだ。

「意外とアイツ力あるんだな……。」

思わずそう呟いてしまう。そこにその高町がやってきた。

「先輩、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない。」

ちなみに結野はゲームなどはあまりしないので偶然とは恐ろしいものである。

「そうですね。」

「うん。」

高町はソファーに座っている結野の前にしゃがむところ尋ねた。

「何かあったんですか？」

すると結野は何かを思い出したのかヒステリック気味に高町を抱きしめた。

「ふえええっ!?!」

高町にとってはこのうえない喜びだが、結野は車が白くなってしまった瞬間を思い出し、息を荒げている。

しばらく結野の体温を楽しんでいた高町だったが結野の異変に気づくと（抱いたまま）結野に尋ねた。

「ど、どうしたんですか!?!」

「ゆ、幽霊だ……。」

どうしてもその「幽霊」という単語が気になるので高町は（まだ抱いたまま）結野に何があったのかを聞く。

ことのあらましを聞いた高町は結野に言い聞かせるように答えた。

「確かにそれは不思議な事ですね。ですが、それはたぶん幽霊のせいじゃない事は確かです。」

「本当か？なんでだ？」

「先輩が持ってた宝石が落ちた瞬間に光が放たれたのなら、光が何らかの作用を起こして車体が白くなったと考えるべきです。原理は分かりませんがそれしか考えられません。」

「そうか。そうか。お前が言うならまあ信じよう。」

息を整え、ぺたんと座りながら高町から離れる。高町は「ああっ。。。」と未練がましく小さく嘆いた。

最後にふっと息を漏らして立ちあがり、結野は言う。

「ごめんな。こんな事で来ちゃって。信じてないかもしれんな。じやあな。帰るわ。」

そう言って帰ろうとした時、ズボンの裾が引つ張られた。足元を見ると、なぜか涙目で高町が裾を引っ張っていた。そして、言う。

「先輩、一晩泊まりませんか？」

その晩はまだ結野のメンタルも十分に回復してないし、翌日は結野の非番日、しかもこの家に高町家の両親どころか身内がいらないらしいと言う事で結野は何も考えず「いいよ。」と即答。

高町は心の中で歡喜。しかし「でも一人にさせてくれ。」と言う言葉でテンションが一気にだだ下がったのはここだけの話。

「う……。。」

目に入るのもうすっかり見慣れた天井。だがそれは自分の部屋ではない。自分を慰めてくれた後輩の家の天井。

またも自身はソファで寝ていた。ソファの前に置いてあるケータイがまだアラームを告げない事に気づき、ケータイを開く。時刻は午前7時半。

非番日とはいえ平日なので高町の仕事もあるだろう。昨日起きた事を極力忘れつつ、高町を起こしに行った。

「では皆さん、本日もいい一日をお過ごしください。それではせーの。」

「ズームアウト」と結野はご飯をほおぼりつつ心の中でひねくねくみる。高町が素直に起きれば7時45分にご飯を食べれたが、なんやかんやあってこんな時間になってしまった。

ちなみに「なんやかんや」は今までの高町の行動から推測してほしい。

だがこれだけははっきりと言おう。結野は何もしていない。いきなりの事で必死に抵抗していただけだ。

現在、朝食をとっている高町と結野。年季の入った家に似合うように朝から塩シヤケやら漬物やら並ぶ。

テレビの中のニュースをBGMにして食べる二人。時折ニュースをダシにして会話が展開される。

特に結野は警察官とあつて事件事故に関する高町の質問に淡々と答えていた。

結野は持ち前の知識を披露できる、高町は結野と話せると言う事でお互いが共有できる幸せな時間。

その時間が終わると高町は裏手の自動車整備場へ出勤。高町は大学には言っておらず、高校卒業後すぐに家業を継いだ。

それはそうと結野はヒマを持って余す事になる。そのまま帰ってもいいが車はここに出しているのですぐに歩いて帰る気にはなれない。

仕方がないので高町家のテレビを無断で借りる事はダメなので自身のケータイのワンセグでテレビを見る事にした。

テレビを見始めて数十分後したときである。ワンセグが中断され、着信画面に切り替わった。相手は黒野だ。

「はいもしもし。」

「あ、結野か！今すぐ名古屋に来てくれ！」

しかしなぜか後ろが騒がしい。喧騒とかじゃなく、何かの爆発音がひっきりなしに聞こえる。向こうは名古屋なんて言ってるがイラクかアフガンかソマリアにいるのかと思うほどだ。

ただならぬ気配を感じた結野は「分かりました。」とだけ言って時間をロスするが遠回りして裏手の自動車整備場へ行く。

整備場へ着くと丁度高町が自身の車を検査していた。塗装作業をしようとしていたのか、自動車用ラッカーが散乱し、シンナーの臭いが充満している。

しかし車体はそれでも真っ白な輝きを保っていた。結野は上司に呼ばれている事もあり、その時は（もうこの車の色は白で固定だな）と思った。

そこに作業をしていた高町が駆け寄ってくる。

「あつ、あの、すみません、先輩。やっぱり何をしてダメでした。塗料が全然乗らないんです。確かに幽霊のせいなのかもしれませんが・・・。」



涙目になる高町をなんとか落ち着かせ、ことのあらましを話す結野。

「……というわけなんだ。」

「それって私も行ってもいいんですか？」

「いや、だめですよ。」

即座に突っ込む結野。電話の向こうで爆発音が聞こえたと言う事は何かしらの事件事故があったという証拠である。ここで一般人を巻き込むわけにはいかないのだ。

「やっぱり、ダメなんですね。」

「ああ。すまないな。高町。だがこれもお前のためなんだ。分かってくれ。」

「分かりました。」

そう言つてとぼとぼと背中を向けて歩く高町。分かってくれたかと結野は解釈したが突然高町はこちらを振り返り、こう言った。

「先輩の友達の有佐さんと月村さんに、先輩が発狂した事言ってもいいですか？」

名古屋市街へと向かう白いセリカ。それを運転している結野は助手席に座っている高町を一瞥する。

「ありがとうございます。先輩。」

「いやあれほとんど脅しだろ……。」

ため息をつく結野。結局発狂した事が同僚に知られる事を恐れた結野は高町を連れてきてしまったのだ。ちなみに高町の言っていた「有佐」とは月村と同じ同僚の事だがまあ後で登場するだろう。

「でも名古屋で戦争？とは……。テレビが写らないのもそのせいですかね。」

ワンセグつきケータイを閉じた高町が言う。だがそれ以外の局でこの事を報道している局は一個もない。黒野の壮大な嘘か情報操作か。しかし数分後黒野の伝えた情報が完全なる真実である事を2人は知ることとなる。

あちこちから煙が立ち上っているのは見えたが近づくにつれて惨状が明らかになってきた。崩壊、または半壊したビルやヒビ割れたアスファルト、つぶれた車はもちろんの事、あちこちに転がる焼死体がここで戦闘があったことを物語っている。

高町は死体を見てしまったのかさつきから下ばかりを向いている。結野も警察官とはいえ、刑事ではないし、ましてや犯罪率・事故率の低い地域に配属された巡査なので損傷の激しい死体はこたえる。

結野のいる交番で処理した事件といえればひったくりと万引きだけな

のだ。

やっとのことで黒野が指定していた場所の近くに車を停めると結野は高町に車から降りないよう言っただけで自分は降り立った。

指定場所に着くと自分が勤務している交番の巡査が集まっている。それらは皆、制服であったが結野だけはナイロンのズボンにパーカーといった私服だ。

「おう、結野。無事に来れたか。」

黒野が声をかける。結野は「ええ」とだけ返事をした。その時、そこにいた一人の警官が声をかける。

「ひどいよな、これ。」

警官の名前は結野の同僚である有佐理<sup>ありささとる</sup>。短髪のさわやかな好青年に見えるが実は重度のアニオタという一面も持っている。

「なんだこれ。俺はガンダムでしかこういつのを見た事がないぞ。まあここを襲った正体は分かっているがな。」

有佐の言ってる事はちょっと不謹慎に聞こえるかもしれないがこれが有佐クオリティだ。

すると月村と黒野がアイコンタクトをした。結野がなんだろうと思っただけで月村がケータイを持ったまま近づいてくる。そして、

「これ、見てください。」

と言ってケータイの画面を見せた。結野はその写真に目を疑う。

ビルを一刀両断する金色のロボット。

ロボット自体のデザインは写真がブレてよく見えないが甲冑風であることは分かる。武器は盾と剣らしく、その剣で目の前のビルを切っている姿が撮影されていた。

とにかく、この地球で作られたものではなさそうだ。そうすると答えは一つ。

「宇宙からの侵略……ですか……。」

「多分な。」

挨拶以来黙っていた黒野が口を開く。

「俺はそれどう考えても傀儡兵だと思っただがなあ。」

またも有佐が入ってくる。結野は気になって質問した。

「傀儡兵って？」

「ああ、昔やってた深夜アニメでな、魔法少女リリカルなのはって

というのがあってな、その敵キャラ。かなり似てるんだけどなあ。」  
ふうん、と適当に相槌をうつ結野。魔法少女なのにロボットってど  
ういうことだと思っっている事はここだけの秘密だ。

次に結野から質問をする。

「月村さんはどのようにこの写真を撮ったんですか？」

「友達から送られてきたんです。」

そう答える月村の表情は曇っている。表情からするに酷い目にあっ  
たか、最悪無くなってしまうたのだろう。結野はそれを避けるよう  
に黒野に話しかけた。

「僕たち警察はどうするんですか？」

「俺達はこれから要救助者の救出に入る。ここら辺一体の消防車が  
全滅してしまっているからな。応援には岐阜や三重、静岡から来て  
るものもある。そこで、だ。全員今からそこに並べ。」

そう言われて結野と月村、有佐は黒野の前に並んだ。

「お前たちはこれから要救助者の救出に向かえ。分かったな。」

すちゃっと敬礼する黒野。3人も敬礼して「了解」と言うと黒野か  
ら持ち場を与えられそれぞれに散って行った。

車に戻った結野。助手席で寝ていた高町を起こすと自分が救助活動をする伝えた。そして車に乗り込み、持ち場へ向かう。

結野の持ち場は名古屋駅近くのビル街だ。ビルのガレキが落ちてこないような場所に車を停める。

また高町に降りないよう言うと自分は救助活動をしているビルへと向かった。

今にも崩れそうなビルの前に停車している多くの消防車。ほとんどが岐阜県のものだ。その横を通って結野は階段を上る。

救助活動の行われていると言う階につくと今まさにレスキュー隊がガレキを撤去して奥にいるらしき要救助者を捜索していた。

「頑張ってください!!!」

「もう少しです!!!」

レスキュー隊員の励ます声が響き渡る。結野は袖をまくり、近くにいた隊員に声をかけ、協力を要請した。

ほどなくして要救助者は全員救助。結野はその要救助者を担架で地上にいる救急車に運び込む仕事を手伝った。

全ての車両を見送ると黒野に指示をもらうため車に乗り込もうとした時だ。路地の先に人影が見える。

近づいていくとそれが高町であることが分かった。びっくりして高町の肩を掴むと責め立てる。

「何してんだ、高町！！車にいろって言っただろ！！まだあの口ポツトがいるかもしれないし、ビルが崩れてくるかもしれないじゃないか！！何してるんだ！！」

「先輩っ！！」

高町は結野の肩を振り払うとそのまま抱きついた。

「イヤですもん……。先輩がいなくなる事が……。」

「た、高町……。」

「私がここに来た理由だって先輩と一緒にいたかつたんです。それなのに先輩は私を一人にさせる……。私も一緒に行っちゃダメって言われましたか！？」

「それが常識だろ！！」

「私にとってみればそんなの横暴です！！」

お前の方が横暴じゃないか、と思った結野は高町を引きはがそうとするがなかなか離れない。

「イヤです！！先輩と一緒にいてくれるって言うまで離れません！

「！」

「な……っ……！」

仕方なく高町を掴んでいる腕を下ろす。結野は少し考え、言った。

「分かった。お前がそこまで心配しているなら一度部長にかけあってみるよ。あの人いい人だからな。」

「本当ですか。ありがとうございます。」

「よし、じゃあ早く車に戻ろう。」

そう言つて二人で車に戻ろうとした時。

結野はただならぬ気配を感じて高町をひっ掴むとビルとビルの間を飛び込んだ。

二人がいた所を駆け抜けたのはなんと紫色の光弾。三日月の形をしたそれはアスファルトを砕いた。

結野が慎重に様子を窺うとやはりそれはそこにいた。

金色のロボット。

月村が見せてくれた写メはぶれていたのによく分からなかったが目視ではその姿をはつきりと見て取る事ができた。

V字バイザーに騎士のようなデザイン。そして両手に装備されてい



るは巨大な盾とランス。

結野は高町を急いでおぶると「行くぞ」とだけ言って走りだした。高町はわけが分からず結野の背中であぐらをかいてうろたえている。

「せ、先輩！今のは何ですか？なんかびゅーんって飛んでいきましたけど！」

「アレがここをこつした元凶だ！」

ビルの間から出た結野であつたが全てが遅すぎた。

まるで結野と高町を待っていたかのように剣を2人に向かって構える3体の金色のロボット。

高町はその姿にあぜんとし、そしてそれらがなぜ自分達に剣を向けているのかが分からず、ただただ恐怖におびえ、声を出せずにいた。

結野はきびすを返そうとするがさらに新たなロボットが現れ、逃げ場がなくなる。

じりじりと近寄るロボット。そしてその中の一体が剣を光らせ、振り上げた。

もうダメだ。

結野はそう直感で思う。やはり高町を連れてくるべきではなかったのだ。自分は甘い。

そして、死を予感したその時。

一台の車がロボットを跳ね飛ばした。足元をすくわれた形となったロボットは地響きを立てて仰向けに転がる。

結野ははっとして車を見た。

白いセリカがエンジンをふかしてそこにはいた。

他人のものではないかと思い、ナンバーを確認するがやはり自分のものだ。次に窃盗の可能性を思うが運転席に人影の姿はない。

脳の中がクエスチョンマークで満たされた頃、さらにとんでもない事が起こった。

セリカが変形しだしたのだ。

ボンネットが反転されて足に、トランクが肩へ、ドアが腕へ。立ちあがったそれは金色のロボットと同じぐらいの3メートルはあろうかという白いロボットであった。

額にはV字アンテナ。端正な顔立ちをしており、目、鼻、口がある。体も白いが肩と脚には黒いラインが走っている。

何よりも目を引くのは胸だ。赤い蝶と言うかりボンのような形をし

た飾りがあり、その真ん中には自分が拾った宝石と同じピンク色に輝く大きな宝石。

結野と高町が目の前で起こった事に処理できずにいるとそのロボットは口を動かさしこう言った。

「ユーノ……。」

### 第3話 襲撃と変形（後書き）

ついにエグゼが登場いたしました。ちなみになのはポジションはエグゼであり、ここでの「高町なのは」は同姓同名の別人です。

あとアリサ・バニングスちゃんも男になりました。名前の「理」はこれも中の人の男バージョンです。

次回は戦闘シーンになります。乞うご期待！

感想などお待ちしております。あとこんなキャラをこんな形で出してほしいというのも待っています。

## 第4話 初陣と捕獲(前書き)

今回はのっけから戦闘シーンです！

## 第4話 初陣と捕獲

結野は事情が呑み込めずにいた。何せ、ロボットに襲われそうになると自分の車が助けに来、しかもそれが変形してロボットになって自分の名前を呼んでいるのだ。

固まっている結野をよそに、白いロボットは言い聞かせる。

「ユーノ、感動の再会だがここは危険です。その後ろの女性と一緒に早く逃げてください。」

言われてさらに混乱する結野。感動の再会とはどういう事なのか。最初に会ったばかりではないか。

そんな事を思ったがとにかく結野は高町をおぶったまま、夕焼けに染まる街を必死に走って行った。

結野を見送ったエグゼは正直驚いていた。まさか異次元でユーノと同じ顔の人間に出会えるとは。うっかり「ユーノ」と呼んでしまったが目の前にいる5体の敵に向き直る。

「これ以上、命はムダに消されてはならない……。レイジングコアアバスター!!!」

怒りをこめて叫ぶエグゼ。敵ロボットは突如現れたエグゼに対し、盾を構えて防御姿勢を取っている。

エグゼは胸の宝石を光らせるとその中から武器を取り出した。さらにもう一本。

それは、SIG SG550によく似たライフルであった。ストックの部分には胸の宝石と同じような宝石が埋め込まれている。

エグゼは地を蹴って走りだした。そして敵ロボットの前でジャンプし、前へ大回転。その間に両手のライフルを眼下の敵ロボットに発砲した。

エグゼのトリッキーな動きに反応できず、2体がビームを受けて爆散される。エグゼは着地後すぐに腕を大きく後ろに流して発砲した。

その攻撃を一体はなんとかかわしたものの、一体は頭をふっ飛ばされた。それを確認したエグゼは頭を破壊され、よろめいている方を無造作に蹴り飛ばし、ライフルでトドメを刺す。

次に今の攻撃をかわした敵ロボットをターゲットに選んだエグゼ。再びビークルモードに変形すると腕を出してライフルを構えたまま走りだす。

そのままエグゼは敵ロボットの周りをねずみのようにちよこまかと回り始めた。敵ロボットは剣を何回も振り下ろすがエグゼの機動力についてこれず、振り下ろした剣は空しくアスファルトに突き刺さる。

そしてついにタイミングを見つけたエグゼ。盾のガードが追いつかない後ろからライフルを撃った。

お尻の部分から胸まで一気にビームで貫かれた敵ロボットは穴から爆発を起こし、倒れる。

そのまま大爆発した敵ロボットの炎に巻かれないようにエグゼは大通りを猛スピードで走り抜ける。追ってくるのが煙だけだと分かる

とロボットモードに変形した。

残りは一体だ。その一体をすぐに見つけるとそこに向かって両手のライフルを発砲しながら走りだす。向こうも盾でビームを防ぎながら走って近づいてきた。二体がぶつかると思われた矢先、動きがあった。

エグゼが左手のライフルを下げ、足首を撃つたのだ。足首をいきなりもぎ取られた敵ロボットはつんのめって前に吹っ飛ぶ。

正面に飛んできた敵ロボットを渾身の力を出して回し蹴るエグゼ。さらにふっ飛ばされた敵ロボットは地面にたたきつけられ、何度もバウンドする。さまざまなパーツを撒き散らした拳句、最後は胴体だけになって爆発した。

エグゼは胸の宝石を光らせ、周りにまだいる敵を探す。もう何もいないことを確かめると結野を探すべく夕焼けに染まる廃墟と化した名古屋の街を走りだしたのであった。

「大丈夫だからね、すぐにお母さんもお父さんも見つかるから。」

わんわん泣く子供をなだめる結野。結野は今、名古屋郊外にある体育館にいた。体育館には周囲から避難してきた住民でこった返していた。

結野と高町はあの後、この体育館に逃げ込み、丁度いた黒野から避難者の心の世話をしてくれと言う事で結野は住民の心のケア、高町は炊き出しに行っている。



そんな仕事でも結野はあの事で頭がいっぱいだった。それは当然自分の車がロボットになった事である。

自分の車がロボットになったと言う事は金色の騎士のようなロボットに襲われた事よりも衝撃的であった。

変形ロボ。

結野は昔やっていたアニメを思い出す。ブラウン管の中で先ほどのセリカロボのような顔をした変形ロボットと自分と変わらない年齢の少年が仲がいいと言うのは当時小学生だった結野にとって憧れだった。

やがて時代も変わり、歳を重ねた結野はそんな夢を脳の片隅に忘れてしまった。そんな夢を叶えてくれた今回の出来事。しかも命を助けられたのだ。

これに関しては素直にうれしいが謎が残る。なぜあのロボットは自分の事を知っていたのか。当たり前だがあのロボットと会った覚えは全然ない。

結論が見つけれず、疲れた結野は黒野から許可をもらって一旦外へ出た。すると高町も合流してくる。どうやら高町も一時休憩を取ったらしい。路地に出ると二人で星空の下を歩く事にした。

「高町はどう思う？」

歩き始めて数分後、結野は高町に話しかけた。

「何がですか？」

「あのロボットの事。」

「どっちですか？」

「俺の車の方。」

少し考え込んで答える高町。

「分かりませんが『正義の味方』ってことだけは分かりますね。」

「だよね。」

「あんなアニメ、昔ありましたね。」

「そうだね。」

「いざ本物を目にすると、なんともいえませんね。」

「デカイだけしか感想がないよね。」

しばらく黙る二人。やがて結野は言った。

「決めた。俺は今からアイツに会ってくる。」

「えっ！？いいんですか！？ボランティアしなくても。」

「仕方ないじゃないか。あんな事があつたならアイツと話をつけてくる。気になって仕事が手につかないとかダメだろ？」

「いいですけど車がどこにあるか分か……りました。」

まっすぐ前を向いたまま口を開ける高町。その表情に「？」と思いながらも結野は前を向く。と同時に結野も同じような表情になった。

ヘッドライトを展開させた結野のセリカがいた。

「あ—————!!!!!!」

すぐ近くには住宅街があるがどうせ誰もいないので大声を出してもよし。それに驚いたのか、セリカは車体をぶるつと震わせるとロボットに変形した。

「あ、あ—————!!!!!!」

またも絶叫する二人。変形したロボットは「うおっ」と小さい声をあげてビビった。

思わず「うおっ」と声をあげてしまった。しかし隣の女性はともかくとして、ユーノに似た人間にまたも出会えた事は奇跡だ。また声をあげられないよう、しゃがんでユーノに似た男に声をかける。

「や、やあ。」

あわあわする2人組。エグゼは喋るスピードを遅くして話しかけた。

「私の、名前は、エグゼです。あなたと、隣の、女性の、名前は、何ですか？」

たじろいで男性は答える。

「お、俺は結野だ！結野光介！こっちは高町なのはだ！お、お前は俺達を殺しに来たのか！？」

エグゼは驚愕した。なにせ、ユーノに似た人物の名も「ゆうの」だからだ。口には自然と笑みがこぼれていたのであった。

一方結野の方はというと頭が混乱したまま。さっき正義の味方云々とは言ったが実物を目の前にされるとパニックになってしまっている。

腰の銃を抜き、エグゼに向ける。エグゼは落ち着いて喋った。

「私は、あなたたちを殺しに来たわけではありません。むしろ助けに来ました。」

そう言って両手を天高く上げる。攻撃意志のない事の表れであった。それにほっとしたのか、結野は銃をしまつて息を整える。

「じゃ、じゃあ、なぜこんな所に来たんだ？」

「本当の話だが私もユーノを探していたら偶然あなたを見かけて。こうして話しているわけです。そうだ、お時間を頂けますでしょうか。」

柔らかく、丁寧な物言いに結野と高町も慣れてきたのか、「いいよ」と言って近くの森に入って行った。名古屋郊外の体育館は小高い丘にあるからだ。

その森の中で結野と高町はエグゼから色々な話を聞いた。

自分がこことは違う魔法も存在している世界から来たこと。

名古屋を襲ったロボットは正体が不明であるが確実にエグゼの世界のものであるということ。

数年前にエグゼの世界で消失した「ジュエルシード」と呼ばれる宝石がこの世界に散らばっているかもしれないということ。

自分達レイジングゴアは元々宝石として生まれ、機械と融合すると人型になれること。

そして、自分を生み出した「ユーノ」が刺客に殺されたこと。

「しかしなあ、エグゼを作った『ユーノ』ってすごいなあ。」

「ですよね。先輩と名前が同じで、顔も同じなんて。」

「向こうは科学者だけだね。」

話を聞いた2人は完全にいつものテンションに鎮火していた。

「で、まずあの金色のロボットについてはお前は何も知らないのか

「？」

「すみません、ええと……。」

「ああ、ユーノでいいから。名字も一緒ならそっちがいいでしょ。」

「はい、分かりました。ユーノ、すみません。私の脳にインプットされている情報にはこの金色のロボットについての情報がないのです。」

「そうか。ん？ちょっと話はズレるが脳ってどういうこと？お前は どういう存在なの？」

「あ、私は生命体なのです。」

「イチから作られたロボットじゃないんだね。」

「そうです。私は元々宝石生命体、レイジングゴアなのでその気になれば他の機械にも乗り移れます。」

「へえ。でもなんで俺が触ったあとに落としたり融合したの？」

「誰かが触ったあとでないと融合できないんです。」

なるほどねえ、でも戦艦や戦車や戦闘機に乗り移ったら強くな？と 結野は思った。

「あ、そうだ。ジュエルシードってなんだ？そっちの世界がなんか やらかしたらしいけど。」

「はい。それについても話そうと思います。ジュエルシードは私の世界にある莫大なエネルギーを持った宝石です。私の世界にも石油や石炭などがあります。それに比べると莫大な量のエネルギーを持つてどこかの地下に眠っています。」

「あれは今から3年前の事。私の脳に入っている情報によるとある場所でかなりの大きさのジュエルシードが発見されました。ある調査機関がそれを持ちかえろうとした道中、不慮の事故によりジュエルシードは次元の狭間に消失してしまつたのです。ですが最近の調査で消失したジュエルシードがこの世界にあることが分かりました。」

「良かったじゃん。」

「はい。ですが、一つ問題が。」

「何さ。」

「そのジュエルシードは元々塊だったのでこの世界に落ちた拍子なのか、砕け散ってしまったようです。」

「何か問題でもあるの?」

「ジュエルシードは莫大なエネルギーを持つゆえ、放出されているエネルギーが暴走するのです。」

「えっ。っていうことは……。」

「そう。突然暴走したエネルギーがあなたたちを襲わないとも限らないのです。」

マジかよ、と呟く結野。すると今まで黙っていた高町が口を開く。

「でも、何か方法がないわけじゃないんですよね？」

「はい。私はそれを封印するだけの力を持っています。どうやら」  
「ノが『もしも』に備えて脳内にインプットしてくれたようです。」

「なるほどね。あ、そうだ。さっきから言ってる脳へのインプット  
ってどういうこと？」

「私は作られている時点でたくさんの情報をコンピューターからイ  
ンプットされたんです。」

なるほどね、と結野は言った。するとあつと何かを思い出す。

「やっべ、もう体育館へ戻らないと。」

「そうですね。」

「ならば私が送ってあげましょう。」

地面に座り込んでいたエグゼは座ったまま変形する。

「さ、早く。」

「ありがとうな。」

結野と高町を乗せたエグゼは森から出ると近くの道に出て体育館へ  
向かったのであった。



結野が体育館へ、高町が炊き出しのテントへ向かうのを確認したエグゼ。ちなみに高町の事はここに向かうまでに結野が話してくれた。エグゼはその時の2人を思い出す。2人はとても楽しそうだった。

「友達、か……。」

ユーノを思い出し、心の奥がずきりと痛む。しばらく感傷的になっていたが突如ある気配を察知した。

（これは……ジュエルシード！）

ジュエルシードの気配だと確信したエグゼはアクセルをふかし、気配のする方角へと向かった。

名古屋郊外の街はロボットの襲来を免れており、キレイな街並みが立ち並んだままだ。しかし住民は全員が避難しており、明かりは見えない。

その住宅街の路地に「それ」はいた。

「ゴオオオオオオオオオ……。」

どす黒いオーラを撒き散らしている丸い物体。これこそが暴走したジュエルシードである。そこにエグゼがやってきた。すぐさま変形して立ち上がる。

「レイジングゴアバスター!!!」

そして胸から名古屋戦でも使ったレイジングコアバスターを取りだす。しかし周りの被害を考え、レイジングコアバスターは攻撃されたら、という防衛理論に基づく事にした。

2体のにらみ合いが続く。その時、ジュエルシールドが体からいくつもの触手を射出した。

「ローリングフェザー!!!」

エグゼが叫ぶ。すると脚側面にある前輪がせりだし、タイヤが剥がれてホイールの上に垂直に立つ。そこからピンク色のエネルギーが放たれた。

エネルギーは羽を形どる。エグゼはその羽をはたかし、上空へと飛ぶ。それでもなお追ってくる触手。

「レイジングコアバリアー!!!」

エグゼがまたも叫ぶと胸のレイジングコアからエネルギーの壁が展開した。「バリアー」の名に恥じぬ通り触手を蒸発させてゆく。

飛べないジュエルシールドはかなり悔しがっているようだ。その様子に鼻で笑いながらエグゼは両手でレイジングコアバスターを構える。

「さあて、封印開始と行きますか……。レイジングコアバスターツヴァイ、キャプチャーモード!」

レイジングコアバスターは二丁あるがそれぞれに「アイン」、「ツヴァイ」と名前がついている。左手に持っているのがツヴァイで、



をかざす。両手の間にピンク色のオーラが溜まった刹那、

「リペアリングボール！」

そのオーラを壊れた箇所につけた。崩れていた塀やアスファルトが徐々に修復されていく。エグゼはその作業が完全に終わると、変形して体育館に向かったのであった。

#### 第4話 初陣と捕獲（後書き）

や、やっと書けた！ただ途中支離滅裂な部分がありますが、今直すのもアレなので読みにくい部分があったら教えていただけると嬉しいです（おい）。

あとオリジナル技についてのネーミングセンスは・・・うん・・・。  
なんかいいのがあったら教えてー！（だからおい）

さて次回はなのは2話あたりをアレンジしたいと思います。

## 第5話 遭遇と負傷（前書き）

今回はなのは本編で言う2話あたりからです。2話＋オリジナル見解になると思います。

それではスタートです！

## 第5話 遭遇と負傷

「起きてくださーい。」

誰かが俺を呼んでいる。

「起きないと所長からとばっちり来ますよ。」

薄く目を開ける。パワーウィンドウ越しに月村がいた。

そうだ。俺は1時辺りにエグゼの中で寝たんだっけ、と思った。ちなみにエグゼはジュエルシード封印後にすぐに帰ってきたので結野は何も知らず、先ほどまで戦っていたエグゼに乗り込んで寝たのだ。

「起きましたか、結野さん。」

「ああ、うん。」

「もうすぐ8時ですよ。炊き出し食べたら所長のところに行ってください。」

「分かったよ。」

「あと結野さん、すごい機能ついているんですね。この車。」

「なんでさ？」

「人が近づいて起こすと自動的に窓が開くんですよ。声を通しやすくしてるんでしょうか。」

その発言にどきりとする。エグゼとしては気を使ったつもりだろうか。だがここで正体がバレるのは良くない。

「生きているみたいですね、この車。」

「ああ、うん、すごいね。」

月村はまだ気づいてないようなので結野は

「そうだ、君が先に朝ごはん食べてきてよ。俺は後で行くからさ。」と促した。素直にも月村は「分かりました。」と言ってテントの方へ向かっていく。

月村の姿が見えない事を確認した結野はほっとした。その時、タイミングよくエグゼが声をかける。

「おはようございます。ユーノ。」

「おはよう。エグゼ。」

「いい朝ですね。ラジオを聞いていましたが今日は一日中快晴だそうですよ。それとさっきの女性はユーノの同僚ですか？とてもしっかりされた方ですね。」

「うん、そうだね。それよりもさ。」

結野は前日に黒野が持ってきてくれた制服を整えて言う。

「窓は自動で開けないでくれ。」



「なぜ？あの方の声がユーノに聞こえるかと思って窓を開けたのですが。」

「それは嬉しいよ。でも、僕と高町の前では宝石生命体だけ他の人から見たら君は一台の車なんだ。僕がいじってないのに窓が勝手に開いたらみんなびっくりするよ？」

「なるほど。でも、窓ぐらいで私の正体がバレるのでしょうか？」

「100%バレないとは限らないよ。分かる人は分かるんだ。」

「そうですか……。自重します。」

「いやそんなに気落ちしなくてもいいでしょ。俺は怒ってるんじゃないんだ。それに、だいたい一般人は変わった車だとしてか認識しない。」

ドアを開けると結野は下車し、そのままテントへと向かった。

「バレないように、か……。」

小走りで向かう結野の背中を見ながらエグゼは寂しそうにつぶやいた。

「熱田神宮近くのパトロール？」

「ああ、そうだ。」

朝食後黒田から今日の活動を聞いた結野は拍子抜けした。

「このメンタルケアはもういいんですか？」

「その手の人たちが続々と集結している。中には芸能人まで来てるぞ。それに、上から命令があつてな。名古屋の南が無法地帯になるのを防ぐんだ。あそこにはまだ人がいるからな。」

「はあ、なるほど。でもなんで僕は熱田神宮近くなんですか？」

「直に分かる。」

黒野はそう言つてニヤリと笑う。結野はそれが気になつたが「分かりました」と言つてエグゼへと戻つた。

「パトロールですか。」

「うん。」

シートベルトを閉めつつ結野は答えた。エグゼのルーフには戻る時に借りたパトランプがちょこんと載っている。いわば簡易型覆面パトカーだ。こんなにカッコイイ覆面パトカーも無いが。

「丁度いいですね。私もジュエルシード探索に向いていますし。」

「ああ、そうだね。まだ見つからないの？ジュエルシード。」

今度はエグゼがその発言にドキリとする。さっき言われた「目立つ

な」に反応したのだ。

一個捕獲したが何を言われるかたまつたものではない。

その場は「はい、まだです。」となんとかごまかしてエグゼは結野を乗せて体育館を後にしたのであった。

前日中心部が襲われたのにもかかわらず熱田神宮周辺はそれなりの人がいた（ほとんどが周辺に住む住民であるが）。ただ、黒野の言つてた通りひつたくりやすりがあり、結野はそれらを見つけるとすぐに逮捕していった。

熱田神宮敷地内にも周辺から来た警察車両があり、かなりの警官もいる。それらに現行犯を次々と結野は引き渡していった。

やがて日も西に傾き始める。結野は黒野から帰還指示をもらうとエグゼに乗り込んだ。

「帰りますか。」

「うん。疲れたな。」

「じゃ、エンジン動かしますね。」

「おう。」

その時であった。







ぜはそのまま変形する。

「大丈夫ですか！ユーノ！」

「ああ、すまん、体を強く打つたみたいだ……。あとは頼む。封印するんだろ？」

「はい。」

「じゃ、待つてるからな。」

「全て、私にお任せください。」

そう言つてエグゼは逃げて行つたジュエルシードを追つて行つた。

熱田神宮が神聖な場所である事はエグゼにも分かっていた。ミッドチルダにも宗教施設は多数あり、それらがインプットされているからだ。

しかもここに来るまでも結野から熱田神宮の説明を受けている。だからなおさらジュエルシードをここから引きはがす必要がある。エグゼはそう感じた。

しかしジュエルシードの反応があるものの、速すぎて動きを掴めない。しかも熱田神宮は森が多いためエグゼは自由に動けない。

そこでエグゼはローリングフェザーを展開させ、限界まで低速低空飛行をしてジュエルシードに追いつくことにした。

ローリングフェザーで飛ぶとさすがに距離が縮められる。あとは向こうのちょこまか動くのをどうにかすればこっちのものだ。それに

「ユーノを傷つけるとは・・・ジュエルシードであっても許さん・・・！！！」

ユーノに打撲を負わせたのだ。これはどうあっても封印しなければならぬ。そう思った矢先。

「そこかっつっつっ！！！！！！！！！！」

ついに動きを補足した。鮎のつかみ取りのごとく飛び出してきたジュエルシードを右手で掴み取る。

そのまま左手に持ち替えると右手でレイジングコアバスターアインのみを取り出す。

レイジングコアバスターアインの銃口を左手から出ているジュエルシードに突きつけるとエネルギーを溜める。

やがてエネルギーは溜まった。あとはトリガーを引くだけだ。エグゼは低く呟く。

「シーリングバスター・・・。」

エネルギーがジュエルシードを包むとすぐに銃内部へ吸収される。ストックの宝石から精製されたジュエルシードが顔を覗くと無造作に掴み、胸のコアに仕舞った。



「16、か……。」

ふと左手を見ると子犬がいる。ジュエルシードはこの子犬と融合していたようだ。子犬をそつと地面に下ろす。子犬はさっきの事があったのにもかかわらず元気に走り去って行った。

さてあとは結野の元へ戻るだけだ。そう思って戻ったはいいのだが。

「ユーノ……？」

結野はアスファルトに倒れていた。びっくりとも動かない。

「ユーノ……？どうした？ユーノ！しっかりしろ！ユーノオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

エグゼの悲痛な叫びが名古屋の街並みにこだました。

## 第5話 遭遇と負傷（後書き）

今回はちょっとエグゼが暴走したせいで戦闘シーンがあっさり気味・  
・・。

ていうかこれ戦闘・・・？

さて次回は結野が大変なことになってますが・・・。そういえばもうそろそろフェイトちゃんのリボも出さなきゃですね。

感想等お待ちしております。

## 第6話 危機と爆撃（前書き）

お待たせしました。6話です。

さて前回、大切な相棒を危機にさらしてしまったエグゼ。今回は精神的に一人で戦っていかなければいけません。

さらに今回、これまでのよりももっと大きい力を持つジェルシードが現れます。これにどう、立ち向かうのか！

それでは、スタート！

## 第6話 危機と爆撃

どうやら、気絶しただけらしい。

エグゼがその話を聞いたのはエグゼが結野の入院する病院の駐車場だ。

熱田神宮での戦いで全身打撲を負った結野。意識を失って倒れてしまったが、その後戻ってきた警官が救急車を呼び、急いで病院に運ばれていった。

エグゼも一緒に向かい、病院の駐車場について内蔵されている集音マイクで結野の状態を盗聴していたが、どうやら目覚めたようであり、今はベッドで安静だという。

よかった。

エグゼは思った。自分の大切な人をみすみす死なせるわけにはいかない。そう決めたはずだが。

あの時は守れなかった。

別に結野を束縛するつもりはないが、エグゼはこの時、できるだけ結野と一緒にしよう、と心の中で誓

った。

駐車場の横に落ちていたジュエルシートを手づかみで取り、封印したのは別の話。

「心配掛けて、すまなかつたな。」

それから数週間後、結野は帰ってきた。駐車場にいるエグゼを見つけ、近づいて彼は言った。

「これからは、エグゼといたほうが良いかもしれん。」

そして乗り込んで言う。エグゼが切り出したかった話題でもあったので、エグゼは「そうだな。」と相槌を打つだけにとどまった。

その日は黒野の命令により一時帰宅した結野。最近なんだかんだあり、自分の家に帰ったのは久しぶりであつた。

部屋は自分が前に仕事に出て行った時のまま時間を止めていた。散らかる雑誌、充滿する甘い臭い。

やや埃をかぶったテレビをつけ、結野は冷蔵庫から冷えたコーラを取り出す。いつ勤務できるか分からないため、お酒は常備しないのだ。

テレビではニュースがやってはいたが、どうやら名古屋市内にあるテレビキー局は無事らしい。

ニュースをやっているがこの名古屋については「大規模同時多発テロ」という名目になっていた。

情報操作。

確かに巨大ロボットが襲ってきたといわれても誰も信じないし、証拠を見せれば日本中、いや世界中がパニックに陥る。

被害者もたぶん政府から口止めされているだろう。そう考えると被害者が不憫でならない。

結野は思った。しかし今は休むのが先だ。自分が倒れては、守るべき人も守れない。

次に自分が出るのは3日後。そんな事を思いつつ、結野はコーラを喉の奥に流し込んだのであった。

翌日。結野は気分転換のため、エグゼと共にドライブに出かけた。

北は危険地帯なので南にある東海市へ。

東海市は当然何事も無く、少し人がまばらに感じたがそれでも立ちよったコンビニやスーパーはそれなりに人がいた。

「私はこういふのを見るとほっこりします。」

途中路肩に止まってアイスをほおばっていた結野はエグゼの発言に耳を傾けた。目線の先にはサッカーしている子供たち。

「そうか。やっぱりお前もそう思うか。」

「はい。隣町であのような戦いがあったのにも関わらず幸せそうに遊ぶ人間。私は悲しまずにいられる事が何よりもいいと考えています。」

「知ってて遊んでいるのかもな。アイツらは。」

子供たちの感情はもう大人になった自分には分からない。でも、子供たちが笑顔なのならそれでいい。

結野はそう思った。

「む。」

エグゼは声を上げた。コンビニで買ったマンガを読んでいた結野が顔をあげる。

「どうした?」

「ジュエルシードの気配がします……。」

「なんだ?場所は分かるか?」

「分かりますが……。まずい。気配が大きくなってます。何かと融合しているみたいで……。」

そして。

「な、何だあれは！エグゼ！」

窓の外に目をやった結野が驚愕の声を上げた。無理も無い。青白く光る柱が天に向かって伸びていたのだから。

「あれか！ジュエルシールドが何かと融合してしまったんだ！」

「じゃあ、俺はあそこで遊んでいる子供たちを避難させてくる！エグゼはジュエルシールドを頼む！」

「了解しました！」

結野はエグゼから降りると、公園へ。エグゼ自身は青白い柱へと全速力で向かった。

柱へ向かうエグゼ。すると柱の中から何か現れた。それは。

「大樹……？」

大きな樹であった。しかし大きさは半端なく大きく、エグゼが計測するとその大きさは名古屋ドームくらいだ。

しかも。



「おわっ！」

木の枝だろうか、アスファルト道路を突き破ってエグゼに襲いかかった。

「チエエエンジッ！！」

間一髪、変形してド太い枝をかわす。胸からレイジングコアバスターを取り出すとその枝に強力ビームを撃ち込み、吹き飛ばした。

そして改めて樹を見る。

「最悪だ……。人間の思いをエサにしたのか……。」

一人つぶやくエグゼ。目に見える被害は道路とそこに駐車していた車だけらしく、建物は枝がたうか巻きついていただけだった。人間は急いで建物の中に隠れたか、あるいは……。

「……。」

最悪の事態を考え、感傷的な気分になる。とにかく、エグゼは気分を切り替えた。

「エネルギーサーチ！」

右目がアイパッチのようなゴーグルで覆われ、一番エネルギーが高いポイントを探す。エネルギーが高いポイント、すなわちそこにジユエルシードがあるのだ。

「サーチ完了！レイジングコアバスターアイン、スナイパーモード！」

レイジングコアバスターアインの銃身上部がせり上がり、スコープになる。トリガーを軽く引き、エネルギー充填。

「ターゲットロック！コントロールマークビーム、発射！」

一気にトリガーを引くと銃口に溜まっていたエネルギーはそのまま球状のビームになってターゲットロックしたポイントに向かう。

危機を感じた樹が枝でビームをはたこうとするがビームはなんと枝をかいくぐり、無事ポイントに着弾した。

これがエグゼの技、コントロールマークビームだ。ビームにはエグゼの「念」が込められており、発射後のビームはエグゼの発する電波で操作する事ができ、確実にあるポイントを狙える。

今回は当たったところが光るマーキング弾となっており、そこにジユエルシードはある。だがシーリングバスターに超長距離射撃機能は無いため、エグゼがいる地点からは少し近づかなければならない。

そのため、エグゼは走りだしたが。

「うわっ！」

次々襲いかかる枝に邪魔され、近づくとどこか遠ざかってしまっている。しかも枝の範囲はどんどん広がっているらしく、このままだと周辺にも被害が拡大しかねない。

二次災害を防ぐためにもエグゼは覚悟を決めた。

まず、走りながらレイジングコアバスターを乱射。エグゼに襲いかかる枝を次々と焼き払っていく。なんとか近づきいたがまだ枝はある。

そのため、作戦を変更。樹に登り、零距离射撃によるバスターを放ち、ジュエルシードを封印してしまおうということだ。

そうと決まればあとは簡単。ローリングフェザーで空中に飛び上がるとそのまま真っすぐにポイントまで向かう。が。

「ぐあっ！！」

叩き落とされ、体を地面に打ち付けられた。それでも立ち上がり、アタックする。今度はバスターを乱射しつつ進んだ。

大樹の根に近づくとすぐに樹の幹へ猛然とダツシュ。幹についたら今度はローリングフェザーを展開させ、そのまま垂直に進んだ。

垂直に飛ぶため、幹を背中にして正面から来る枝を悠々と撃ち落とすエグゼ。ポイントに着いた時、エグゼは驚愕した。

人が二人いたのだ。

眠るように寄り添う男女。男の手からはしっかりとジュエルシードの気配を感じ取れる。おそらく拾ったジュエルシードを女の方に渡そうとしてこうなったのだろう。

ジュエルシードは人がかわる事でこのように力を大きくする事は知っていた。だが、関わられた人間がどうなるのかはエグゼにも分からない。

「死」

自分の使命、ジュエルシードを回収するにあたってそれだけは避けたい事柄だ。だが、こうなってしまった以上どうすることもできない。

そう悩んでいた時、エグゼを衝撃が襲った。

「ぐあああああっつ！！！！」

とりわけ太い枝がホバリングしているエグゼを攻撃。地上30mの高さからエグゼはまたも叩きつけられた。

さらに運の悪い事に、枝がエグゼの四肢に巻きつき、ギリギリと締め上げる。

「……………ツツツツツツ！！！！！！！」

声にならない痛みが全身を駆け巡る。文字通り体が引きちぎられるのかと思つほどだ。

そして正面には一本の鋭い枝が自分を見据えるようにいる。

自分は殺されるのだ。ユーノを殺した敵に報いることなく。

やがて枝はまつすぐエグゼを辛い抜いた……。

かに思えたが。

「うおっ！なんだ!？」

突如枝が炎上した。それと同時にエグゼを縛っていた枝も炎上。自由になったエグゼはその光景に驚愕した。

樹の根、枝が燃え盛っていた。むろん自然発火ではない。では何かと言つと空から爆弾が降っていた。

空を見上げると、全翼機、B-2が飛んでいる。どうやらあそこから投下されたものらしい。

これはチャンスとばかりに再び舞い上がるエグゼ。今回のジュエルシードはエネルギーの中心が幹に固定されているため、捕縛する必要はない。

舞い上がりながらレイジングゴアバスターアインにエネルギーをためる。やっと中心に着くとすぐにビームを放った。

夕暮れの東海市。なんとかエグゼが被害の拡大を食い止めたものの、至るところには被害の爪痕が残っていた。

あの戦いの後、消防車や救急車が大勢駆けつけて火事を消火。ケガ人も無事に運ばれていった。

近くの住宅街で避難誘導をしていた結野が来て、ビルの裏に隠れていたエグゼに話しかける。

「ハデにやっちゃったな。」

「すみません。」

「いいよ。被害の出ない戦闘なんてないんだし。それよりもそんなに敵強かったの？」

「ええ。だが、なんか飛行機が来て私を助けてくれました。」

「どんな飛行機だったの？」

言われてエグゼは柔らかい土の上に指でそのシルエットを描く。

「これですね。」

「あ、これ。」

見覚えがあった。

「なんですか？」

「詳しい事は分からないけど、アメリカのステルス戦闘機らしい。前ニュースでやってた。今それ沖縄の基地にいるんだって。」

「なんでそんなところから・・・?」

「分からないけど・・・とにかく良かったな。」

「ええ。助かりました。」

「じゃあ、帰ろうか。」

「はい。」

エグゼはビークルモードになると結野を乗せ、名古屋へと向かった  
のであった。

もうすぐ訪れる運命を知らずに・・・。

## 第6話 危機と爆撃（後書き）

いかがでしたでしょうか。エグゼ。本家とは違い、「あの人（？）」がちらつと登場しています。

ちなみに最後の文では「ステルス戦闘機」となっていますが誤植にあらず。

一般人はそんな細かい違いは気にしなさそうなので「爆撃機」を「戦闘機」にしました。雰囲気は出るかと。

そんなわけで次回！ついに「あの人」が登場。その前に、ですがまずは「あの人の前日談」みたいな感じの文章を書こうと思います。



こんにちは。ピコピコハンマーです。

さて前回、東海市での死闘の末、ジュエルシードを封印したエグゼ。

その最後、謎のB・2が登場しました。

そこで今回はこのB・2についての話を始めようと思います。それでは、どうぞ！

時間を名古屋が謎のロボットに襲われた日から数週間前に戻そう。

沖縄県アメリカ軍嘉手納基地。沖縄本島中部のほとんどの面積を占めるこの基地には、日夜さまざまな飛行機が離着陸している。

普段は戦闘機、輸送機、AWACS、ヘリが離着陸し、それを目当てに見に来る人が多いのも事実だ。だが、この日はスポッターはおろか、基地の近くに住む住民の多くもあるつわさを聞きつけて基地周辺に来ていた。

「B-2が来るらしい。」

B-2とは、アメリカ軍が持っているステルス爆撃機だ。全翼機という胴体自体が翼と一体化したまさに異端機。そのため底は平らで、レーダーの電波をほとんど反射するため、ステルスの中のステルスだ。

だが、ステルス機ゆえに謎が多く、ましてや日本に来た事はめつたにない。そんな謎のステルス機がいきなり日本に来るといふ。

理由は分からないが撮るものは撮る。それがスポッター。また、異例の事態と言う事もあり、向けられるカメラの中には、テレビ局のものもあった。

時計の針が正午を回る頃、沖縄の空を見張る那覇ラプコンのレーダーに、噂のB-2の機影が映った。そして機影の横にはこのB-2のコールサインである「FATE」の文字が躍っていた。

沖縄特有の澄み切った青をした空と海に挟まれ、轟音を放ちつつ飛行するB-2。公式名称は「Spirit of Arizona」。そして非公式名称は「Ship of hell」。

皮肉にもこの非公式名称がこの後のB-2の運命を表す結果となった。

「那覇ラプコン、こちらはフェイトです。航空情報はAを持っています。嘉手納飛行場までのレーダー誘導を要請します。」

「こちらは那覇ラプコンです。フェイト、レーダー誘導を許可します。高度6000フィートまで下がり、機首を005度に向けてください。」

「了解しました。高度6000フィート、機首を005度に向けます。」

エンジンの音が少し下がり、海面が少しだけ迫る。無線を終えた副操縦席に座る女性はほつつと息をつき、前を見据えた。

彼女の名はテストロッサ・ミズキ。階級は少尉で、年齢は31。名字が示すように日系だが、顔は欧米の顔つきだ。長い金髪を後ろで結ってポニーテールにしている。

そのミズキ少尉が隣の機長席に座った、これも女性のパイロットに話しかける。

「大尉、私実は初来日なんです。でもまさかこんな形で日本に来るとは思いませんでした。」

「うふふ、そうね。でも仕方ないもの。作戦だし、しかも日本は寄港地だし。」

そう答えたのは大尉のプレシア・イガラシ大尉だ。年齢は48。こちらも日系の欧米美人だ。こちらは黒い髪をボブカットにしている。

ちなみに今回は初の二人とも女性パイロットということで軍の中では結構噂になっていた。

「でも信じられないですよえ、相手がロボットだなんて。」

「映画の中の話かと思ったらホントに映像がきたものねえ。」

ここで今回B-2が来た本当の目的をお話ししよう。

この日から時間がさらに数日前に遡る。その日、韓国のソウルを名古屋を襲ったものと同じロボットが襲った。

韓国軍の要請により、アメリカ軍は在日米軍の戦闘機を使ってわざわざソウルまで行き、市内のロボットに対して攻撃を加えた。

しかし並みのミサイルでは効果的なダメージをあげられず。そこで

アメリカ軍は最終手段としてB-2からJDAMによる爆弾の絨毯を敷く事に決めた。そこで白羽の矢が立ったのが本土のある基地にいたB-2というわけだ。

その後、B-2と那覇ラプコンの間でいくつかの交信が交わされ、機体も基地に近づいてくる。そして那覇ラプコンとの最後の交信を終え、嘉手納アプローチに交信先が移った。

「嘉手納アプローチ、こちらはフェイトです。航空情報はAです。」

「フェイト、機首を230に向け、高度を3000フィートに落として下さい。」

「了解しました。機首230、高度を3000に落とします。」

さらにエンジンの音が下がり、海面もどんどん迫ってくる。それから数分して、また交信。

「フェイト、嘉手納アプローチです。ADF/ILSによる滑走路23Lへの進入を許可します。タワーにコンタクトしてください。」

「了解しました。ADF/ILSにより滑走路23Lへ進入。タワーにコンタクトします。」

ミズキ少尉はそう言い終わると無線の交信先をタワーにする。やがて滑走路が迫ってくるとそのタワーから着陸の許可が下りた。

「タワーです。フェイト、滑走路23Lへの着陸を許可。風は220方向から5ノット。」

「了解しました。滑走路23Lへ着陸します。」

ミズキ少尉は言い終えると同時に二つのレバーを下げる。フラップとランディングギアのものだ。さらにライトのスイッチもONにする。

フラップとギアが下がり、ギアから白い光が放たれた。それと同時に高度が下がり、地上が迫る。

そしてそれからまもなく黒い翼は沖縄の地に降り立ったのであった。

「すぐに燃料とJDAMを積んでいます。何分でやってほしいですか？」

「じゃあ1分。」

「ムリです。」

「じゃあ私たち今からブリーフィングするからブリーフィング終わるころにお願い。」

「了解しましたっ！」

機体から降りたイガラシ大尉と話していたグランドスタッフが機体に向かう。遅れてミズキ少尉も下りると二人でブリーフィングルームへ向かった。

たくさんの隊員でこった返すブリーフィングルーム。ミズキ少尉と

イガラシ大尉はカウンターに書類を置き、すぐそばにいるパソコンを操作している隊員とブリーフィングを始める。  
ちなみにこれは天気のプロファイニングと作戦会議を兼ねている。

「今日の日本海の天気は？」

「大丈夫です。ばんばん晴れですよ。」

「分かったわ。」

ちなみに先ほどからミズキ大尉は天気図と対馬海峡が中心のチャートを交互に見ている。マジメだ。

「AWACSは出るの？」

「そりゃもう。」

「作戦はそこから来るのかしら？」

「はい。ちなみにAWACSのコールサインはバルディッシュです。」

分かったわ、と返事するイガラシ大尉。

その頃、B-2では電源供給が行われていた。基地所有の黒い電源車がチューブをつたってB-2に電気を送る。

電源車とは文字通り飛行機などに電気を送るトラックで、普通のトラックの荷台に大きな電源機が積んである。ここ嘉手納基地のもの

は軍用らしく、深緑と黒が合わさったような色だ。

電気を送る作業をしている隊員。脚立に載って作業をしている。彼は翼の真下から前にズレたところに電源車を止めていた。

作業が終わって脚立から降りたとき、ふわつとした風が吹く。その一瞬後であった。

「う・・・うわっ！！！！??？」

突然、電源車が赤く光り出したのだ。あまりの眩しさに作業員も目を覆う。やがてその光は収まったのだが、そこにはありえない光景があった。

電源車の異変はブリーフィングルームでも確認する事が出来た。距離はあるため目を覆わなければならないほどではないが、太陽がもう一つできたのかと思うほどだった。

エプロンに面している窓にたくさんのスタッフが押し寄せる。イガラシ大尉は光の方向が自分達の乗ってきたB-2だと分かるとエプロンへと一目散に駆け出した。

B-2に急いで乗ったイガラシ大尉。コックピットで点検作業を終えようとしていた整備員にまくしたてる。

「ちよつと！今の光見た!？」

「え？まあ光を直接は見ていませんがなんか光っているのは分かり



ましたね。」

「機体は大丈夫なの!？」

「大丈夫ですよ。」

そこにコックピットに遅れて入ってきたミスキ少尉が口を挟んだ。何かを言いかけようとして一旦口を閉じて再び口を開く。

「機体に異常はありませんでした。急いで中に整備士さんも入りましたが油圧系や電気系統に異常はないそうです。」

「そう・・・なの?」

「はい。」

「機体トラブルが起きたらあなたのせいよ。」

「絶対大丈夫です。」

「・・・分かったわ。作戦の変更は?」

「ありません。」

「そう。」

イガラシ大尉が落ち着く。一応10分を使って油圧と電気の手エツクが行われたが何も出なかった。ミスキ少尉も座った時であった。グラウンドから無線が入る。

「はい。」

ミズキ少尉が出た。

「ミズキ少尉ですか。すみません、イガラシ大尉に替わっていただけないでしょうか。」

はてと思いミズキ少尉はイガラシ大尉に言う。

「イガラシよ。どうしたの？」

「軍司令部から命令がありました。」

「まさか。」

「ええ。作戦中止との事です。」

予想されてはいたが答えに目を丸くする。

「そう。分かったわ。」

そう答えたもののイガラシの体は震えていた。操縦桿のマイクスイッチを握り手が小刻みに細かいリズムを刻んでいる。

ややあつてイガラシは答えた。

「今から一旦基地に戻ります。替えの飛行機はまた3日後に来ます。」

「了解。」

答え終わると膝の上に広げたチャートや書類を全て片づける。ミズキ少尉に言った。

「一旦帰るわよ。」

「電源車が行方不明ですって？」

臨時で二人のために開けられた基地内の宿舎の部屋にいたイガラシ大尉が声をあげた。

「はい。私たちが機体を離れた時にすでにもう基地を出ていたらしいですよ。」

「でも、誰がそんな事……。」

「いません。」

ミズキ少尉の答えに怪訝な表情をするイガラシ大尉。

「いないってどういう事？」

「誰も乗らずに電源車は逃走しました。」

「それってまさか……。」

「幽霊ではありません。いや、でも幽霊よりももっと恐ろしい事があるんです。」

きつと表情を引き締めるミズキ少尉。

「黒かった電源車が赤茶色になっていたそうです。サビたのではありません。光に染まってしまった、と作業員は証言しています。」

沈黙が辺りを漂う。そしてイガラシ大尉は言った。

「わけが分からないんだけど……。」

「本当です。」

「だって考えてもみなさいよ。韓国になんかロボットが現れて、そして今度は話が基地で電源車が無人走行？誰だって頭がこんがらがるわよ。」

「だけど、全てが起こってしまったんです。」

そう言っつてうなだれるミズキ少尉。すると、「格納庫へ行ってきた」と言っつて部屋を出て行った。

夜の格納庫には数人しか人がいない。その全員が整備員である。また、格納庫にはあの二人が乗ってきたB-2が保管されていた。

時計の針が午前2時を回った頃である。轟音を立て、何か格納庫に突入してきた。あの電源車だった。電源車にはねられ、工具が入ったカートが大きな音を立てて転がる。

整備員はびっくりして警報を鳴らした。しかし、さらに驚くべき事が起こった。

電源車が変形を始めたのだ。荷台が下がって脚に、荷台にあった電源ボックスは二つに分かれて体らしき運転席の横にくっつき、肩と腕になった。運転席からは顔が出て、目に光がともる。

「チェーンジッ！！アルフ！！」

電源車から変形したロボットのアルフが地に降り立つ。小型トラックから変形しているため、小柄で格納庫の天井に頭が付く事はなかった。

頭の形はオオカミを模しているが、顔つきや声は子供っぽい。アルフは周りを見渡す。

騒ぎを聞きつけたのか、たくさんの武装した隊員が大勢駆けつけていた。ここは空軍基地であるが、いくら空軍隊員でもそれなりの対策はしているのだ。

これに警戒したアルフは拳を突き出す。すると手の甲が手自体から浮き上がり、隙間から鋭い爪が展開した。

それに恐れたか、隊員が少しだけ下がる。その時であった。

「貴様、何者だ！！」

格納庫内に大きな声が響き渡る。声の主はミスキ少尉だった。その問いにアルフは答える。

「僕は、アルフだ!!」

ロボットが答えたのが珍しいのか、あぜんとする隊員達。さすがのミズキ少尉も驚いたが、すぐに冷静になってさらに尋ねる。

「何しにここへ来た!!」

「ハルバードのレイジングコアを探しに来た!!お前が持つてるな!!ハルバードを返せ!!」

びつとミズキ少尉に指を差すとそのまま本人に飛びかかるアルフ。しかしサイズを考えていなかったのかミズキ少尉が屈伸して身かわしただけで反対側の壁を突き破った。

反対側の壁に殺到する隊員たち。それとは逆にミズキ少尉はB-2へ向かう。B-2は保管されてただけで整備は終わっていた。

整備だけが終わっていることを確認したミズキ少尉。そこにイガラシ大尉が来た。ミズキ少尉は声を先にかける。

「何してましたか。ずいぶん遅いじゃないですか。」

「許可を取ってたのよ。」

「許可?」

「ええ。この子を避難させるね。」

B-2をばんばんと叩くイガラシ大尉。

「どづいつ事ですか？」

「格納庫には曲がりなりにも監視カメラがあるの。さっきの映像が上層部に伝わってね。」

「なんで伝わったんですか……。」

「監視カメラ担当の人が一瞬でネットワークに流したの。」

ミズキ少尉は「ええ〜」といった顔をする。

「私はまずそこへ行つてたの。で、国際電話で急いで上層部に電話。そしたら向こうも飲み込んだみたいですがすぐにB-2の避難許可をくれたわ。」

ドヤ顔で言いきったイガラシ大尉は指示を飛ばす。

「とにかく、あのロボットから避けるべくこれを発進させましょう。今仲間たちが必死に食い止めてるわ。」

そう、今アルフは隊員による銃撃を受けて足を止めていた。ちなみにアルフにとっては銃の弾なぞ屁でもないがたまに来るグレネードランチャーによってひっくり返っていた。

その間にB-2に乗り込もうとした二人。だが。

「ハルバードを返せええええ！！」

人波からなんとか逃げ出したらしいアルフがまたミズキ少尉に襲いかかる。しかしミズキはというと。

「ちょっと待って。」

殺されそうになっているのにもかかわらず手を差し出した。アルフも思わず急ブレーキで立ち止まる。

「あなたの言っている『ハルバード』って何？」

「ハルバードは僕の友達なんだ！君の体からその気配を感じる！左胸から感じるんだ！」

ミズキ少尉はパイロットスーツの左胸を覗く。そこには昏にもらった宝石があった。それを取り出し、天に掲げる。

「この事かしら？」

「あ！返せ！」

「いいけど、私たちが襲わないで頂戴。これ以上襲うとなると・・・」

その時だった。アルフの後ろを取ったらしい一人の隊員がグレネードランチャーを放つ。グレネード弾はアルフの背中を直撃した。

背中が爆発炎上する事はなかったがそれなりの衝撃が背中を襲う。まるつきり油断していたアルフは前に倒れた。

危機を感じたミズキ少尉とイガラシ大尉は急いで走り去る。しかしアルフが倒れた衝撃でミズキ少尉は倒れた。



ミズキ少尉の手から宝石が放たれる。倒れたアルフは手を伸ばしたが大きな指先で宝石を弾いてしまった。

弾かれた宝石が勢いよく飛び、B - 2の上に乗った。さらにアルフが破った格納庫扉のスキマから強風が突然吹きつける。

B - 2の上にあつた宝石がそれにあおられ、機体の中央に乗った時であつた。

いきなり宝石から光が放たれた。光はB - 2全体を包み込む。光の眩しさに周りの人間はおるか、アルフも目を覆う。

光がやむとすぐにB - 2に変化が起きた。

翼は上に、機体下部は後ろに伸びるように変形。機体砲部が横に変形して腕になる。元B - 2だった「それ」は立ちあがる。

機首がそのままぱたん倒れ、顔が出た。アルフのような目鼻口のあるロボットではなく、目はあるがマスクだ。また、V字アンテナもあるがその根本にCを縦にしたようなアンテナもある。

そのロボットは周りを見渡し、こう言ったのであつた。

「ここは・・・どこだ？」

さていよいよフェイトちゃんポジションのロボットも登場。今回は少しリアル寄りにしようとしたため長くなりやむを得ず分けてしまいました。

そんなわけで次回！フェイトちゃんロボがソウルで大暴れ！どんな活躍をするか乞うご期待！

今回ソウルを登場させましたがここを選んだ理由としましては「グローバルな感じにしたいが近場が良く、アメリカと仲の良い国」にしたためです。  
決してどこのテレビ局のような感じではありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6489r/>

---

魔装戦士 EXE-エグゼ-

2011年10月8日22時17分発行